令和7年度第1回宮城県文化芸術振興審議会 議事録

- 1 日時 令和7年7月17日（木）午前10時から正午まで
- 2 場所 宮城県行政庁舎4階 庁議室
- 3 出席者
 - 出席者：志賀野委員、小塩委員、村上委員、田淵委員、阿部委員、
玉淵委員、花田委員、大澤委員、梶賀委員、高田委員
 - 欠席者：渡邊委員
- 4 議事 第4期宮城県文化芸術振興ビジョンの素案について
- 5 概要
 - (1) 開会
 - (2) 挨拶
 - (3) 出席者紹介
 - (4) 議事
 - (5) その他
 - (6) 閉会

6 議事内容

※宮城県文化芸術振興条例第30条第1項の規定により、志賀野会長が議事進行を行った。

【議長：志賀野会長】

それでは議事に入ります。第4期宮城県文化芸術振興ビジョンの素案について、事務局から説明をお願いします。

【事務局：遠藤課長】

はじめに、第3期の中間見直しを第4期ビジョンの策定に変更した理由について御説明します。

前回の審議会まで第3期宮城県文化芸術振興の中間見直しを行うこととしておりましたが、今回、中間見直しではなく、第4期ビジョンの策定を行うこととして整理させていただきたく、その理由について御説明します。資料中、上段に示しておりますが、①中間見直しとした場合、②第4期の策定とした場合のそれぞれの策定スケジュールや、③新県民会館の開館に関するスケジュールをまとめたものでございます。表に①で示した通り、中間見直しのままで進めますと、3年後の令和11年度から第4期ビジョンとなりますが、そうなりますと令和9年度に審議会で骨子案、令和10年度に素案から最終案までの審議やパブリックコメントを迎えることとなり、新県民会館の開館前から内容を検討しなければならなくなります。一方で、今回、中間見直しではなく第4期ビジョンの策定といたしますと、表に②で示した通りでございますが、令和12年度までの計画となり、第5期では開館後の状況を踏まえたビジョンの審議ができるようになります。また、前回まで中間見直しとして内容の見直しを進めておりましたが、今回、全体構成の見直しや施策体系の整理、指標の掲載など内容に様々な変更が入りましたことから、見直しの域を超えて改定に近いような変更内容となっております。なお、新県民会館・NPOプラザ複合施設の管理運営計画では、新県民会館は開館後3年までを導入期と定めており、導入期

は貸館中心で共催事業を通じた施設間ネットワークの構築などの段階にあります。今回策定するビジョンでも、管理運営計画で予定していた様々な取組みがございますので、足並みを揃えて、第4期ビジョンにも導入期で行う事業を盛り込んでいきたいと考えております。以上が第3期ビジョンの中間見直しを第4期ビジョンの策定とした理由でございます。

時間に限りがございますことから、このまま続けて素案について御説明させていただき、ただいま御説明いたしました件への御質問や御意見につきまして素案の説明後に一括でお願いできればと思います。

それでは、続けて第4期宮城県文化芸術振興の素案について御説明いたします。初めに資料1「第4期宮城県文化芸術振興ビジョン素案概要」を御覧ください。こちらの資料は、前回お示しいたしました案をもとに、各項目の概要をまとめたものになっており、下線を引いた箇所が現行ビジョンからの変更箇所になります。

まず「第1章 第4期ビジョンの策定にあたって」では、第4期ビジョン策定の趣旨やビジョンの位置づけ、期間、対象とする文化芸術の範囲について記載しております。このうち策定の趣旨とビジョンの期間については内容の更新をしておりますが、そのほかは現行ビジョンと内容に大きく変更はありません。なお、策定の趣旨及び第4期ビジョンの期間については、今回、前回までの第3期の中間見直しという前提での記載から、第4期ビジョンの策定という前提に沿った内容に変更しております。

続きまして「第2章 文化芸術を取り巻く現状と課題」について御説明いたします。「1 文化芸術を取り巻く環境の変化」及び「2 国の動き」につきましては、国際化の進展等の社会情勢の変化や、これまでビジョンに入っていなかった劇場法などについて追加しております。「3 宮城県の文化芸術の状況」につきましては、これまでビジョンにこの項目自体がなかったのですが、県政運営の基本指針である「新・みやぎの将来ビジョン」や新県民会館を含む鑑賞・体験環境の変化などについて記載が必要と考え追加したものです。「4

第3期ビジョンの取組み」と「5 文化芸術を振興する意義」については、項目としては現行ビジョンと変更はありませんが、時点修正や社会情勢の変化を踏まえた内容の更新を行っておりますので、内容については資料2の素案本体で後ほど御確認いただければと思います。

次に第3章の基本目標とめざす姿について御説明いたします。項目としては初めに現行ビジョンと同じく基本目標を記載し、次に現行ビジョンには無かった「めざす姿」を記載しております。基本目標については新県民会館という文言を記載し、また、現行ビジョンよりも“高”循環の創出に向けた方法等について具体性を示すために更新しております。めざす姿につきましては、前回までの審議会でも御説明しておりましたが、県の文化芸術振興条例に掲げている「文化芸術の香り高いみやぎの実現」とし、県民や関係者、地域などの各主体それぞれに基本目標に掲げる“高”循環によりもたらされる波及効果について記載しております。

続きまして「第4章 施策の展開」について御説明いたします。こちらにつきましては、素案概要の2枚目も合わせて御覧ください。2枚目の方には施策体系や各施策の概要、主な取組事例を掲載しております。前回の審議会でもお示ししておりました通り、方針ごとに1つ重点施策を定めておりまして、こちらに示した施策の赤囲みをしているものが重点施策になります。なお施策や取組事例について、資料2第4期宮城県文化芸術振興ビジョン素案を用いて内容を説明させていただきます。

資料2の29ページを御覧ください。29ページから41ページまでが施策の説明になっておりますが、記載方法としては現行ビジョンと同じく、29ページ目を例にしますと、初めに方針を記載し、続いて「(1) 社会課題等に対する文化芸術の活用」などの施策、続いて①から③のような、各施策の概要説明と、最後に取組事例として具体的な事業等を掲載している形になっております。なお、前回の審議会でもいただきました御意見等を踏まえて主に概要説明の部分を所々加筆修正してございますが、特に加筆した箇所といたしましては、39ページになります。39ページの「(3) 新県民会館等をはじめとする文

化施設の機能の充実」で、今回のビジョンでは新県民会館の開館を大きなトピックとしておりまして、特に⑥に記載しております着実な整備と、開館後の活用を見据えたソフト面の取組みが重要と考えまして、⑦から⑨の項目を記載しております。また、今年度新規事業の「地域文化コーディネーターの配置」や「地域文化サポート事業」、「文化芸術体験促進事業」等につきまして、40ページや41ページなど、関係する施策の取組事例に追加してございます。

それでは資料1の1枚目にお戻りください。「第5章 推進体制」について御説明いたします。第5章では現行ビジョンと項目としては概ね変更はございませんが、推進体制につきましては、新県民会館の運営主体を追記したほか、進行管理については全体に係る成果指標のほか、方針ごとに指標を設定することとしております。指標についての詳細を御説明いたしますので、資料2宮城県文化芸術振興ビジョン素案の44ページ・45ページを御覧ください。44ページに記載のとおり、検証にあたりましては全体指標と方針ごとの指標を設定することとしております。初めに全体指標ですが、こちらは県政の基本的指針である「新・みやぎの将来ビジョン」で用いる指標でございまして、それとの整合性を勘案しております。また、方針ごとの資料につきましてはそれぞれの方針に含まれる事業から2つピックアップして掲載しております。なお、44ページに記載の通り、検証にあたっては定量的と定性的の両面での評価が必要と考えられますことから、これらの指標のみにとらわれずに関係者への聞き取り等による評価も合わせて行うこととしております。最後に、本日参考資料といたしまして、第3期県文化芸術振興ビジョンに基づく令和6年度の事業実施状況を一覧でお渡ししてございますので、後ほど御覧いただければと存じます。事務局からの説明は以上となります。

【議長：志賀野会長】

ありがとうございました。

素案も含めて全体状況の説明をしていただきました。皆様方も事前に送られていると思いますけれども、私もこの素案を読むだけで2時間ほどかかりまし

たので、今日これをしっかり隅から隅まで議論するわけにはとてもいかないということで、皆様方にそのあたりを含めて御協力願いたいと思うのですが、今回、名簿の下の方からそれぞれ御意見を賜りたいと思いますので、御準備をお願いいたします。

最初に、私が見させていただきまして、事前に少し意見なども申し上げましたけれども、よくぞこれだけ体系的にまとめていただいたなというふうに思います。それは何かといいますと、これまでになかった国の位置付けです。特に劇場法なども入りましたし、それから、県の計画そのものも、我々はこの審議会ではあまり詳しく見ていなかったわけなのですが、そういうところも含めて体系的にこの文化芸術振興ビジョンがどういう位置付けになっているのかということがしっかり入っているというところで、非常にクリアに頭の整理ができていったなというふうに思います。それからもう1つは、内外の情勢を見ますと、法律改正も含めてなのなのですが、これまで文化芸術そのものを振興していくという立場から、あらゆる社会的な課題に対して文化芸術がどういう意味を持つのかということが語られるようになり、かつそれを目標にしなければいけないという、ある種のパラダイムチェンジということが起こったように思います。その中で非常に多様な部局に及ぶ施策がこの中に盛り込まれていくことにならざるを得ないわけですね。そのあたりの位置付けも相当に出てまいったのではないかとこのように思います。

そしてそういった全体的な状況、社会的な課題を解決というか、解決に貢献する文化芸術というところでいいますと、それを意識化してかつ可視化していくというのがこの段階に入ってきているのではないかとこのように思います。特に今回は美術館の改修、そして新県民会館の整備というものが大きなトピックなわけでございます。そうすると、それをどのように、このビジョンに基づいて運営していくか、あるいは事業的な構想を持っていくかということについては、やはり先立ってやらないと、できてからでは間に合わないということで、3期ではなくてやはり4期のビジョンにしなければいけないという理由が、今説明されたわけでございます。もうすでに県民会館は工事に着手してい

るわけでございますので、そういう中で、数年先あるいは10年位前から本当はやっていてもおかしくはないわけなのです。そういったことですから、今回はぜひ踏み込んで、これまでも色々御意見がありましたけれども、今後どのようにやっていくかということの道筋あるいは指針みたいなものも、頭出しができればよろしいのではないかなという思いでございます。

まず私の感想を言ってしまいました、そういう中での御意見を賜りたいと思います。それぞれ分けて議論していくととても時間が足りない、自分はこの辺が特に言いたいのだということ、ぜひ率直におっしゃっていただき、それでそれをまとめていきたいと思っております。それで書き込めるものは書き込む、書き込めないものは書き込まないということにはなるのですけれども、それは県の判断ですが、そういう中で議論を進めてまいりたいと思っております。よろしいでしょうか。では、最初にWEBで参加の高田委員からお願いします。

【高田委員】

全体を拝見しまして、やはり新県民会館の開館に向けてもネットワークの基盤作りという点を、まず着実に準備期間で進めていくと情報発信の推進にも繋がっていくと考えています。自分自身の関わる団体でも、できることからこの準備期間でやっていきたいなと素案を拝見して感じていたところです。具体的にイメージを膨らませて、やはり実行力のあるところで繋がっていくことが、実際のこの計画の実行に繋がるのではないかと改めて感じています。

【議長：志賀野会長】

高田委員は、実行力とかそういったものを求めていらっしゃるというところでもございました。

それでは、梶賀委員お願いいたします。

【梶賀委員】

志賀野先生は読むのに2時間かかったけれど、私ももっとかかりました。で

も本当によくぞまとめてくださいましたというふうに思いました。

私がとても嬉しかったのは、文化芸術の範囲に国民娯楽の囲碁と将棋をきちんと入れてくれたことです。現実的に県民会館でやられたら良いなと思っていたことができた。あと、そこで出版物などのところで、レコードという時代ではないと思うので、そのあたりをもう一度考えた方が良いと思いました。私は今日意見をまとめてきましたので、あとで事務局にはこのまとめたものをお渡ししますからメモを書かなくても大丈夫です。

新しい劇場は、過去の事例を見てもどうしても建築分野の話が先行して誰がどう使うかの具体策が後回しになりがちです。いわゆる劇場法では、専門的人材の養成・確保及び職員の資質の向上が求められています。すでに県ではコーディネーター経験の豊かな人材を確保されているかもしれませんが、その際に重要と思われるのは、質の高い大型コンテンツのコーディネーターはもちろん、これはお金があればあるほど可能性があります。でももっと大事なものは、県民のための企画、市町村が運営する劇場の活性化に繋がるコンテンツだと考えています。県内を、子供が参加している舞台芸術という括りで見ただけの場合、仙台市以外では登米祝祭劇場さん、えずこホールさん、塩竈遊ホールさん、七ヶ浜国際村さんなどがすでに長く取り組まれ、ホールを活用した地域活性化への取り組みがなされています。もう長年やっています。しかしどの劇場も、近年事業予算を取るのに大変苦労されていると聞いています。新しい県民会館に最も求められていることは、そうした県内の劇場と共に育つ、ということではないでしょうか。そのためには、県民会館が主軸となり、地域と連携して育てる仕組みのある劇場の姿を熱望します。特に、未来を担う子供たちが憧れ、目指し、鍛錬を積むモチベーションとなるような企画が望ましいと思います。将来的に演劇やオペラ、ミュージカルを含む分野の要素を含んだ教育科目が、義務教育や高校教育の中で取り入れられることがあるかもしれない、多分あると思いますが、また日本語を大切にしている教育やそれに伴うコミュニケーション能力の醸成を図る意味で、新県民会館のスタートと共に地域の劇場が協力しながらそのことに関する教師やアーティストを含めたワークショップや作品上映会などの枠

組を作っておくことなど、先んじた取り組みがなされていくことを願います。具体的にやっていかないとだめだと思います。やはり県民のために。ですから多分よそでも雰囲気だけではやるとは思いますけれども、そうではなくて現実的にその学校の子供たちにとかそういうところを具体的に早め早めにやっておかないと、育成は時間がかかりますので、そういうことを一番強調したいと思いました。以上です。

【議長：志賀野会長】

ありがとうございました。

強調されましたのが、新県民会館に対する期待とそれからのその機能というところで、やはり一番は人材育成ということになるのでしょうか。人材育成も2通りあるわけですね。専門的な人材と、それから教育的な子供たちというところで、実は表向きは目に見えない、時間のかかるものがあるわけですね。そういったことを意識して、新しい会館は様々なギャラリーもあるスタジオもあるしというところで、それをフルに活用してそういう機能を用意するというか、事業としてあるいは仕組みというところが大事かもしれません。そういうところを強調していただきました。今後、議論として出てくるかもしれませんけれども、色々な人材育成の要請とかあるいは支援というのがよく言われます。地域版のアーツカウンシルという言葉が当たると思うのですけれど、そういう意味合いのことが今語られたのではないかなと思います。

それでは次に大澤委員お願いいたします。

【大澤委員】

少し古いお話をしておきたいと思うのですが、高循環の話なので、高循環の話なので、仙台の話をしてしまうと、仙台の文化行政は割と立ち遅れていた時代があったのですが、そういった中である種の高循環のきっかけになったのではないかと今になって思っているものがあり、それはジュニアオーケストラでございました。ジュニアオーケストラはその後かなりコピーされてどこにでも

あるものになってしまうのですけれども、その時は確か120名くらいの定員に対して700人応募があったのです。それで、新聞でもすごく騒いでしまって、2つ作ったら良いのではないかとか、ジュニアオケに入ったら仙台フィルに入れるのかとか、話が非常に混乱した時期がありましたが、地域が騒いだ、という言い方をされたかと思うのですが、それがある種一つの出発点で、文化というものがわくわくして面白いものだなという話が始まった一つのポイントではなかったかと思うのです。“高”循環については、時々お話してはいますが、要は“高”循環というものの出発点とか、県美術館であれ県民会館であれどこかにあるのかもしれませんが、そういう出発点みたいなものを意識していくのもポイントではないかと思っております。少し体系化ではないのですけれども“高”循環というものがどうやって引き起こされていくかについても、ジュニアオケで具体的に地域を巻き込んだムーヴメントみたいなものが一度巻き起こったものですから、そこからそういう目で見られるようになったのだというふうに思っておりますので、そういった何かは美術館や県民会館みたいなものに入っていくとなおよろしいのではないかと思っております。

【議長：志賀野会長】

今の話は、仙台市が取り組んだ、大澤委員が実施された実績の大きな一つだと思うのですが、ジュニアオケの事業ということで、やはりプロのオーケストラとタイアップしてやるべき仕事と助成と子ども育成という3つ絡みになって生まれたものだと思います。そういう出発点としての仕組みとして何か、では県民会館はどうなのかということになるかと思うのですけれども、梶賀委員のところではミュージカルとか、舞台芸術というのは総合性があるわけですよ。ダンスもあれば歌もあるし演技もあるし、背景でいえば美術的な映像とかもあるので、そういったものに分解していくと様々なネタというのでしょうか、多様な課題に着目していくと、これからお話いただく玉渕委員のところでも演劇の集団があって、ずっと育って10年来やっていて、相当地域に根付いて一つの地域の重要な教育機関のコンテンツになっていますよね。そういうよ

うに何か県民会館でも持つ役割の一つではないかという話だと思って聞きました。

それでは花田委員お願いします。

【花田委員】

志賀野委員や梶賀委員のように時間をかけて読むことができなかつたものから、拝見したところで思いつくところをお話します。

まずは事前に送っていただいた資料の中で、施策の展開図が大変わかりやすく、細かいところは素案を見れば良いというところで、とても良いなと思いました。これを見てよくわかると感じました。

梶賀委員から新県民会館が県民と共に育つ、というような話がありましたが、まさにそうだなと思ひまして、我々地方の館のような仙台から遠く離れたホールが各所にありますけれども、それらと共に育つ新県民会館。さらに逆もあると思うのです。新県民会館とともに、地方の館も一緒に育つという意味合いもあると思いますので、更なる連携みたいなものも具体的な取り組みの中にあるかと思ひますけれども、そういうことも大事かなと思ひます。

梶賀委員のお話にもありましたけれども、事業費は当方も削減されております。建物も30年経つものですから、修繕費もかかるということで、そちらの方に追われてしまうようなこともございますし、30年経って何か新しいネタがあるのかといわれますと職員も苦勞しておりますけれども、そういう中で新県民会館という起爆剤のようなものが期待できるのかなというふうに思ひまして、共に育っていききたい、育てていききたいという思ひがあります。

最後に、こちらでも県の施策でいろいろとお世話になっております芸術銀河とか各種のワークショップですね、これらをぜひ更に充実させていただければ更にお世話になりたいと思ひます。そのあたりが事業費削減を挽回できる要素でもありますし、それが一つの起爆剤になって新たにこちらの館で広がっていくということにもなるのではないかなと思ひます。さらに、新たにコーディネーターさんを配置され、コーディネーターさんにも色々御指導いただきました

と思います。よろしく願いいたします。

【議長：志賀野会長】

ありがとうございました。今出た論点としては連携ということですね。県内あるいは東北全体から見るとかなりの数の施設があるわけでご覧にして、そういうところとどう連携するか。もちろん公文協という組織はあるわけですが、コロナの時期にはアートキャラバンのような事業があって連携というものが強調されたのですが、コロナがあってもなくても連携して、それぞれがウィンウィンになるようにということでもあります。国の助成金もざっと調べてみたところコロナ明けで実は地方の助成金はそんなに増えていないし、むしろ下回っているのではないかと、大きな機関・団体に対する助成金はあるものの、なかなか個人が申請してもらえそうなメニューがほとんどなくなってしまったのです。そういったことから考えると、特に地方の場合は施設の老朽化や長寿化といったところが課題になっていますけれども、そちらの方にほとんど予算が割かれてしまうということがありますので、新たな事業費を生み出すのが難しくなっています。しかもそれがファンドレイジングでうまく民間からお金が回るかというところもそうでもないという状況があって、そうなるにますます工夫が必要になって、連携による事業の期待が大きくなると思います。そういった意味で花田委員の意見は大変大事なことであつたと思います。

それでは玉淵委員をお願いします。

【玉淵委員】

まず、ビジョンについてですが、国の動きもきちんと反映されており、非常によくまとめられていると感じました。私は現場の立場ですので、具体的な事業や取り組みにどうしても目が行きますが、可能な範囲でしっかり盛り込まれていると感じています。

取り組み事例として多くの課が関わる内容が挙げられており、これほど多様

な取り組みがあるのかと改めて思いました。地方の施設として、仙南広域圏ではえずこホールが中核の施設として位置付けられています。他分野連携が謳われている中で、県の施設となれば、これほど幅広い関わりがあるのだと感じました。

梶賀委員もおっしゃっていましたが、えずこホールは長年、先代から取り組みを継続しており、現在は施設の老朽化や人材の高齢化という課題を抱えています。「33年は一世代」といわれますが、えずこホールもまもなく30年を迎え、建物も人も変化の時期にあります。

こうした中で、県が新たに県民会館事業を立ち上げるにあたり、県の果たす役割は何かという点について、私は以前から「人材」という観点を重視すべきと申し上げてきました。人材育成はキーワードであり、アーティストや地元の表現者、またそれを支えるスタッフや職員といった担い手の育成も重要です。そして、小中高大生といった子どもたちも、将来の担い手として含まれており、本当に幅広いと感じております。

県民会館は単に施設を運営するだけではなく、県全体の「私たちの県民会館」であってほしいと思います。県民会館そのものの土壌は県全体にあるわけです。そのためには、県民会館の存在意義やアプローチを示す仕組みづくりが必要です。たとえば他分野連携です。私は公文協のアートマネジメント委員会の委員長を務めており、令和4年には、宮城県公立文化施設協議会として、コロナ禍の中で「文化観光」をテーマに研修を実施しました。現場に赴いて話を伺うと、多様なステークホルダーが連携している姿が見えてきました。これは、災害を経験したことで、お互いに力を合わせ、つながり合いながら「復興」という目的のもとで連携せざるを得なかった結果、連携が当たり前になったという背景があったのだらうと思います。こうした連携について、研究や検証まではいかなくとも、学びや共有の場が必要ではないかと感じています。

後でいただいた資料では、導入期、普及期という段階が示されていましたが、そもそも「普及」とは何を普及させるのか、という点が重要です。導入期においては、普及に向けた準備を意識した取り組みや研究が必要だと考えま

す。菅野さんや林さんといった、さまざまな知見を持つ方々が今後どんどん関わってこられると思います。そうした中で、導入期から普及期に向けた具体的な行動を検討し、課題や取り組みの優先順位を整理していただきたいと思います。

また、連携（特に他分野連携）、人材育成、人や施設のネットワーク構築といった視点も踏まえ、研究や議論ができる場づくりができれば良いと思います。

全体を俯瞰したうえで、新しい県民会館の開館に向けたビジョンと、具体的な課題整理や取り組みの方向性について意見を申し上げました。長くなりましたが、以上です。

【議長：志賀野会長】

ありがとうございました。

事業としては、先ほど申し上げましたようにジュニアアクターズという自前の継続的な事業をされていると同時にアウトリーチというのも一つの大きな柱ではないかと思います。県内で最も数多くアウトリーチをなさっているのではないのでしょうか。そういう意味ではアウトリーチというのは連携の中でもやる主体がはっきりしていますから、どこに届けるか、どういう風にやるかで見えてくるのですが、連携というと、みんなが平等とってしまうのですが実は違うのです。どこかが主体になって、その取り持ちというか、いわゆる事務局的な世話役というか汗を流すところが無くては成立しないものです。それが今までは本当は県民会館がやらなければいけないことになっているのですが、人や予算の問題があり簡単にはできないので、連携と言ってしまう外に投げて適当にやって、というふうに思ってしまうのですが、実はそれをリードするところが無くては成立しないものなのです。だから私もつくづくアートキャラバンで感じたのですが、やはりどこかが汗を流してそういうことをやっていけないと無理なのです。だからそれを何とか確保して、県民会館さんは少し考えなければいけないということです。連携と言われたら実は自分ごとの話になります

よ、ということを少し申し上げておきたいと思います。

それでは阿部委員をお願いします。

【阿部委員】

宮城県文化振興財団理事長の阿部でございます。

今日は冒頭からやはり新県民会館に関するお話、期待を込めてのお話が大変多かっただと感じており、新しい会館を運営する主体として県の文化振興財団を指名していただいているということからすると、今日は今までで一番緊張感をもって話を聞いており、なかなかのプレッシャーも感じているのですが、そういった観点からしますと、今年度例えば県の方で予算措置をしていただいて、これまで対応していなかった未就学向けのアウトリーチを委託事業ということで当財団に投げかけていただいて、そういったことをやるようになったというようなことも、これも新しい県民会館に向けての地域との連携であったり、あるいは子供たちの人材の育成であったりというところに繋がっていくのかなと思っております。これはやはり率直に私が感じているのは、県と財団との連携関係がどうあるべきかというようなところで去年・今年の体制で消費生活・文化課の方が予算確保のためにかなり頑張っていたおかげで、これが結果として好ましい連携関係として出てきているのかなと思っております。そういった点では、これを引き続き継続的に開館前、それから導入期といったところでも、より発展させて取り組んでいくことが重要なのかなと思っております。まずは一旦、計画とは関係ないのですが、そういったお話をさせていただきました。

計画についてですが、これは前に計画の見直しという観点の時にも少し話したのですが、この体系ですね。3つの方針が掲げられており、「文化芸術の持つ力の活用」が冒頭に来ており、落ち着いた場所としてここが良いのかどうかとずっと引っかかっているところです。今回改めて過去の計画を見たところ、第2期の計画ではこれが一番後ろにあったものが、第3期の計画の時には一番上にきたということで、そこを書いた時はこの審議会でも様々御議論があったの

かなと思うのですが、今回第4期で示しいただいたものも冒頭にあるというようにことです。社会全体を見渡した時の重要性としてどうなのかということと、あとは文化振興ビジョンの中での重要性はどうなのかといった観点で見た時に、落ち着き場所は少し違うのではないかと思います。大澤委員もおっしゃっていましたが、“高”循環という観点からも、もう一度考えていたのですが、そういった展開をすると、やはり文化芸術を支える人材の育成であるとか、伝統芸能の継承であるとか、その人たちが活動する場となる施設・機能の充実であるとか、そういったものが基盤となって、それを土台として、そこで様々な活動が行われることによって社会課題の解決に繋がっていくということです。社会課題、例えば社会包摂的な観点であるとか観光振興といった時に、社会包摂における文化の位置付けであるとか、観光資源としての文化、そういったものはやはりこの体系でいう2番・3番の取り組みを基盤として成立するものなのかなということです。そういった循環の流れからすると、やはり「文化芸術の持つ力の活用」は、一番後ろに持っていった方が良いのかなと少し思っていたところです。第3期計画でこれが初めに来たというところも、議論をよく確認しないままでの私の発言なので、私の認識に少しずれがあるかもしれませんが、そんなことを思ったところです。

【議長：志賀野会長】

ありがとうございました。項目の順位というか位置づけというのですか、そういった御議論でした。

私が理解しているのは、最後に43ページに円の図がありますよね。円で見えていただいて、それぞれの立場とやるべき目標みたいなものが円になっていたと思うのですが、そう考えると、これは行政の施策としてのプライオリティということではなくて、やはりそれぞれのポジションごとにやらなければならないことがたくさんあるというのが、この文化芸術の置かれている状況かと思えます。そういう意味では、ソーシャルインクルーシブなことから観光から国際交流から産業、あるいは防災全てあり、というところがありますので、

それをどう使うのかというところで言うと、そのコントロールタワーをこの消費生活・文化課が担うのだというふうに思っていたいて、どうそれぞれの部局なり課なりに意識付けをしてやるかというか、あるいはこの芸術の観点から見た時に拾い上げてあげるというかエンカレッジしてあげる、そういうものを取り出すための振興計画ではないかなと思うのです。ですから、上に書いてあるからプライオリティが高いかどうかというものではないようにも思えるのです。円として考えようと。ですからそんなふうに緩やかに考えていただいて、何から何まで全部消費生活文化課ができるわけではないので、できるところからやっていくというところなのかなと思います。ですからそんなふうにあまり責任を重く感じなくても良いのかなと私なりに思っているというところですよ。

それでは田淵委員お願いします。

【田淵委員】

よろしく申し上げます。昨年度までは富谷高校に勤めておりました。高校の校長の異動が2年くらいのスパンですので、なかなかこういった分野に関して十分な引き継ぎができないままこの場にいることをお許しいただきたいと思えます。

私は宮城野高校に勤めておまして、宮城県高等学校文化連盟の会長を務めております。日頃、ここにいらっしゃる皆様には高校生の文化芸術活動を支えていただいて本当にありがとうございます。それでは、私のほうから3点だけお話しさせていただきます。

1点目がこのビジョンの見直し、それから第4期ビジョンの策定についてです。まず、新県民会館の開館に伴う様々なことが生じてくるということで、第3期ビジョンから第4期ビジョンに切り替えるというところ、それは本当に必要なことだと思います。県民会館の建て替え等がなければ、このビジョンの第3期のままで進められていたかもしれませんが、そこに大きな県民会館の開館、それと開館に伴う色々な諸事情もあり、第4期ビジョン策定に至るという

ところは自然な流れかと思えます。

そして2つ目としては、高校生の文化芸術活動の発展についてお話しさせていただきますと、素案の43ページの円の図の中に教育機関が右の方にありまして、ここに文化芸術活動を創造・発表・享受できる機会の充実、文化芸術活動を支える人材の育成というところで、この部分についてはまさに我々が取り組んでいるところであります。高等学校の文化連盟としましては、現在22の専門部がありまして、その専門部ごとに様々な活動をしており、その専門部の発表の場を様々な会場を舞台として行っております。本当に様々な会場をお借りして高校生の文化芸術の発表の場を提供していただいているのですが、今年度は、総合文化祭という形だけで考えると、22の専門部のうち、県民会館を使う専門部が2つだけで、それがダンス専門部と文芸専門部なのです。それ以外については、日立システムズホールだとか、仙台メディアテークだとか、トークネットホールだとか、そういった会場を使わせていただいています。私が申し上げたいのは、高校生の活動の場は意外と閉じられた環境というか会場になってしまっているのかなと感じており、これは我々のPRの仕方も改善の余地があると思うのですが、一つ具体的な例をお話ししますと、私は昨年度までこの高文連の専門部の書道専門部と、それから小倉百人一首かるた専門部の部会長を務めておりました。書道専門部の活動は、これまで生徒の発表は県美術館の県民ギャラリーで行っておりました。そこでは、参観される方というのは高校生とあとはその家族に限られていて、一般の方が来場されることはほとんどなかったという状況です。それが今、美術館の改修などもあり仙台メディアテークに会場を移したところ、多くの方、一般の方にも来場していただき、ふらっと立ち寄った外国の方にも書道を見ていただくような機会に恵まれました。そうすると、我々高校生の活動と、それから県の様々な政策の中で行われているもの、あと会場ということを考えて時に、もっと上手な連携の仕方があるのかなと感じていて、生徒たちからすると多くの人に見てもらえる、それも全く自分たちと関係のない人たち、一般の方たちと交流が持てるというのはすごく励みになることです。先ほどお話しした書道専門部が仙台メディアテーク

に会場を移して多くの方に来場してもらい、そういった反響は本当に生徒たちにもものすごくエネルギーになっていて、今後の活力に繋がっていたというようなことがありますので、そういった意味でうまく高等学校文化連盟と、県、あと新しい県民会館などがうまく連携できるような形を考えていければなと思っています。

そして最後の3つ目なのですが、エンタメ、特にアニメーションのコンテンツに関してなのですが、これは本校の教育活動を少し御紹介することになって恐縮なのですが、宮城野高校は6クラスのうち1クラスが美術科の専門学科です。その関係もあって、特に美術とか芸術に興味の高い生徒が集まっており、今年度からは、仙台にアニメーションスタジオの「スタジオMAPPA」という株式会社があり、「呪術廻戦」といったアニメーションを扱っている会社だそうですが、そこと連携をしまして、年に何回かそこのクリエイターの方に特別講義をしていただくというような協定を結んでおります。高校生の活動としてはそのように、民間企業とも連携しながら活動の幅を広げておりますので、色々な形でこの高校生の活動にスポットが当たるようなことをこれから進めていきたいと思っておりますので、今後ともぜひよろしく申し上げます。

【議長：志賀野会長】

ありがとうございました。

今、様々な事例を頂きました。もう少し開いていくというか、そういったことが課題だとおっしゃっていただいたと思います。ただ、私が思いますのは、今のダンスブームやアニメのブームを見ますと、開く・開かないに関わらずものすごく影響を与えていて、そのエネルギーが社会に与えているインパクトはものすごく大きいと思わざるを得ません。

そして、今、助成という観点から言いますと、文化庁系ではない経済産業省が新たにメニューを出し、それに呼応して文化振興基金もそういったメニューを開いていることから、これはかなり重要な日本プロモーションのようなものに実はもうなっていて、とても大きい要素をこれから持っていると思っております。

で、そのエネルギーをどこかでどう開いたら一番良いのだろうか、と思います。むしろ大人の側がそれを活用していかないといけないと思います。それは色々な舞台芸術にも伝播していて、様々なところで見え隠れしているのですね。ですから、色々な情報交換をまずしていただいて、思わぬところでつながっていることもたくさんありますので、そういった点で一つの論点として大事なポイントを言っていたのかなと思います。

それでは次に、村上委員お願いいたします。

【村上委員】

宮城教育大学の村上です。こちらの第4期ビジョンは非常によくまとめていただいたと思っております。第4期のビジョンの中でも、第1章の第4で文化芸術の範囲に様々な内容のものが含まれていますが、その中でも社会芸術を組み込んだことも非常に大きな成果だったわけですね。社会の諸課題を創造的なアートの手法で解決していくソーシャルアートのようなものを、今後組み込んでいくということが、この範囲の中に含まれているということになります。また、社会の諸課題の中でも、第2章のところで見ますと、その背景の中でも震災がありましたので、もちろん震災復興も大きなテーマかと思いますが、人口減少も最初の方で大きく取り上げられているわけですね。第2章の方でも数字まで入っていますが、ピークの2003年や2020年ぐらいまでは人口が230万ぐらいいたのですよね。それが2050年ぐらいだと予測では183万ぐらいに減るということで、仙台はまだ良いのでしょうかけれども、宮城県は広いですから、地方の方などは本当に過疎化が進んでいるという状況です。それに伴って空き家や空き店舗なども非常に増えていると。そういった社会の諸課題を創造的なアートの手法で何とかできないかというのも、今後の大きなテーマになっていくのではないかと思います。ビジョンの第5章で新県民会館の運営などが書かれていますが、以前「ハコモノだけ作ってもダメでしょう」という話をしたことがあると思います。パソコンを買ってもソフトを入れなければ使えない、といったありがちなハコモノ行政がある中で、プログラムオフ

ィサーのような方をぜひ入れてくださいとか。今回、地域文化サポート事業の中で地域文化コーディネーターを配置されるということで、これは非常に良かったと感じております。やはり、ただのハコモノだけではなく、地域とつながって地域の課題を把握して、それを協働でやっていくようなプログラムオフィサー的な方がもっと増えないとうまく機能していかないと思います。

これはよく比較されるかと思うのですが、仙台市でも音楽ホールが計画されています。あちらの音楽ホールは2031年に作る予定だと思うのですが、大阪万博の大屋根リングを作られた藤本壮介さんのスタジオがデザインに携わっています。ただそれだけではなく、山崎亮さんという studioL 代表のコミュニティアート、コミュニティデザインの専門の方が入り、市民と一緒に館を作っていこうというワークショップを月1回など実施されているのですよね。地域・市民の意見を組み込みながらハード面も含めてデザインされている、市民参加型のものをされているわけですよね。そういう中で、ただの音楽ホールだけではなく、仙台市の中心部の震災メモリアル拠点の複合施設と謳ってありまして、音楽だけではなく震災を伝えていこうという明確なビジョンが非常にストレートにコンパクトに分かりやすくメッセージとして伝わるものになっています。それを市民参加型でやっているということです。そういう観点で考えますと、こちらの県の音楽ホールの方も、様々な社会の諸課題をそれで解決していくとか、NPOプラザのようなものがあるわけですからNPOと連携してやっていくという、非常に大きな特徴的なメリットがあるわけです。地域文化コーディネーターを含めてプログラムオフィサーなどもいらっしゃいますし、さきほどのお話にもありました地域版のアーツカウンシルのような機能を組み込んでいく、音楽ホールとアーツカウンシルの複合施設のような分かりやすいビジョンがあると、仙台市と県との差別化、区別化もできるのではないかと思います。

また、この第4期ビジョンに繋がるようなものとして、やはりハード面が整備されるに伴って、人件費、つまり人、あるいはそれに伴う予算的なものについて、つきやすい時だとは思っているので新しい仕組みをぜひお考えいただきたいと

思います。文化施設のハコモノだけでアートプログラムを行うだけでなく、施設以外でも行うアウトリーチ的な活動も非常に大事なので、東京のーツカウ
ンシルなどもアートポイント計画で様々なNPOと連携して美術館以外の小さ
なギャラリーや街の中、商店街などで、丸投げではなく協働でやるという仕組
みで助成事業などを実施しています。それが非常に効果的で、地域全体が文化
的に豊かなところになっていくことにつながるかと思います。そういう意味で
は、人口減少や空き店舗といった課題も含めて、多くのアーティスト支援にも
繋がるアートレジデンスのような事業も非常に効果的ですし、地域再生に繋がる
ようなものだと思います。そういった補助事業や助成金など、様々なものを
組み込みながら今後の第4期ビジョンにつなげていっていただければと思いま
す。以上です。

【議長：志賀野会長】

ありがとうございました。

主にアート面からの様々な御意見があったと思います。ソーシャルアートな
どについては美術館だけではありませんよね。県で実施したりボーンアート・
フェスティバルはすごく大きなお金が動いたと思いますが、瀬戸内や越後妻有
と比べると観光面では少し弱いという評価なのですよ。もう少しテコ入れした
らどうかな、とも思いますがやはりやり方次第ではないかと思います。村上委
員がもう少し乗り出してやったら良いのではないのでしょうか。そういったこと
を含めてもう一つ仕組みというところで、やはり地域版のーツカウンスルの
話が出ました。それからプログラムオフィサーという言葉が出てきましたね。
これは割と大事なキーワードでありまして、様々な企画などをディレクション
していく役目、そういったことがどうしても必要なのです。その専門家が果た
しているのかというか、位置付けがされているかどうかは今のところ見当たら
ないのですが、私が見たところ35ページにアソシエイトディレクターという
言葉が書かれています。既にこの素案に書かれています。ここが一つ起点にな
って、アソシエイトディレクターというものがどういう存在なのか、これはお

そらく複数人で、それほど偉そうな人というよりはもっと現場的な人をイメージしているのではないのでしょうか。それこそがすごく大事で、たくさんいた方が良いというか、かなりボランティアな組織でも良いと思いますし、ただし事業費的なものは何か呼び水的なお金がないと動けないのです。これはぜひ心していただくと良いのかなと、今お聞きして思った次第です。

では、小塩委員、お願いいたします。

【小塩委員】

宮城教育大学で音楽学を教えています小塩です。

まず、第3期ビジョンの中間見直しではなく、第4期ビジョンを策定するという御決断については、まさしく英断で、とても理解できるもので賛成いたします。また、全体的な施策の概要についても、非常に多方面に配慮されていて、分かりやすく網羅的なものであると感じました。

本筋ではないところかもしれないのですが、素案の4ページの背景の部分、環境の変化というところで、新型コロナウイルスの影響とデジタル化について書いてあるのですが、ここに若干の違和感を持ちました。第3期の中間見直しということであれば、このような位置付けでも良いのかもしれませんが、デジタル化は新型コロナウイルスの影響で促進された部分は大きいとは思いますが、むしろ時代の流れであって、これはコロナウイルスと必ずしも結びつけなくても良いのではないのでしょうか。逆にコロナウイルスの影響を述べるのであれば、デジタル化の促進に加えて、対面が断たれた時間、その部分の影響をどうやって取り戻すかというところまで入れて、背景として記述された方が良いのではないかと思います。確かに何年か経って、一見対面での活動も活発になっているように思いますが、特にやはり若い世代の人たちが、必要な時期に対面の経験を持たなかったということについては、現在でも影響は続いていると思います。新型コロナウイルスの影響をもし背景にするのであれば、積極的に対面の良さのようなものを体験させる、何かを考えるということまで含めないと、若干足りないのではないかと感じました。これが1点です。

もう1点は、他の方々のお話にもありましたように、新県民会館ができた
り、美術館が改修されるなどで大きく変わっていくと思いますが、その時に仙
台市中心にならないで、宮城県全体でうまく文化を振興していくイメージをど
うやって作っていくか、ということではないかと思います。その時に、重要な
ことの一つは、ハコができるとやはりそれが使いやすいジャンルがたくさん進
んでいくと思いますが、そうではないものにどうやって援助するか、というこ
とではないかと思います。あとはやはり地域の差のようなことにどう目配りを
するかということだと思います。特に自分の専門と関わってお話をすると、
「2 文化芸術の振興と継承」の中の(5)ですね、伝統文化や文化財の保存
と継承というところに非常に危機感を持っております。全体的に地域の人口が
減少している中で、特に無形文化財は継承していく中で色々な苦勞が起きてい
ると思います。地域の文化を大切にしようと言っているだけでは、おそらくも
う継承が難しいと思いますので、それぞれの地域の文化を県の文化として県民
全体が守っていくというような意識改革を、ぜひ県主導でお考えいただきたい
と思いました。

それと関連して、例えば今日の資料で、第3期のビジョンの実施状況という
ものがあり、その最終ページの下から2段目のところに、無形文化財の保存事
業について基準値は9件だったけれども、令和6年度は0件だったとありま
す。これは様々な事情があっただろうとは思いますが、この
あたりについて、何か今までのことをただ繰り返すよりは、何か新しい試みが
必要だと思いました。今までの皆様方の御発言でも、地方でどういうことをす
るべきかということがありました。そのあたりと連携するような可能性も考え
ながら、地域の文化財、これは一度なくなってしまうと取り戻すことが難しい
ものですし、宮城県の特徴という意味でも非常に重要なものだと思いますの
で、地域で機会を作るというだけでなく、宮城県全体に向けて発信するような
ことをぜひお考えいただけたらと思いました。以上です。

【議長：志賀野会長】

ありがとうございます。

今までの議論も含めて、御指摘のなかった部分も指摘いただいて、それぞれが大変ありがたい御意見だったと思います。

それで文化財に関しましては、文化財保護法の新しい改正が行われましたね。これはまさに観光などとの結びつきや新しい活用方法ということだろうと思いますので、これはもうこの全体の中に位置付けというか、もう入れてあります。ちゃんと入っていますね、最初のところに。だからそれも含めて、地方というか県内の隅々までの目線でということやっていただければと、こういことございましたのでよろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは吉田委員お願ひします。

【吉田委員】

前回のこの審議会ではあくまでも構想段階というものでしたから、色々な意味で大きく捉えた内容でございましたが、あれから数ヶ月経って飛躍的に体系化され、そして構造化された内容にまとまってきているなど思っております。しかも社会の変動を見据えて、それも適用される5年間だけでなく、その先まで見据えた内容になっているのではないかなという受け止めをさせていただきました。

私からですが、皆さんはこれが具現化された時やそれに係る周辺の事業といった内容の声が多かったのですが、あくまでも議題に基づき、この内容に限定してお話をさせていただきます。

やはり何と言ってもこのビジョンは、行政の方々の手にとって見てほしい指針になるべきもの、しかも県民もこれに関して理解し、かつ活用してほしい内容でございますので、その充実感というものもある程度意識したものにしていかなければならないのかなと思っております。そんな観点からいくつか意見を申し上げたいと思ひます。

まず1ページになりますが、第4期ビジョン策定の趣旨でございます。小塩

先生もおっしゃいましたが、第3期の見直しではなく第4期としたことには私も賛成でございます。しかし第3期の見直しの時はこの策定の趣旨で良かったのですが、先ほどから各委員から出ております社会の変動、特に高齢化というものを見据えた時に、この策定の趣旨としてコロナウイルスだけで良いのか、県内文化施設等の再整備だけで良いのかという疑問を抱きます。と言いますのは、各方針、3つの方針に基づいた色々な施策が考えられておりますが、その中のキーワードは、いわゆる「人」なのですよね。人なのです。それから「地域」なのです。この人、地域を配慮した内容になっているということは、やはり高齢化、少子化、まとめて言えば人口異動、異動は「異なる」の方ですね、別の言葉で言えば人口動態というような表現も入ることによって、まさに脈絡のある構成になるのかなという感じがいたしました。

続きまして11ページに行きたいと思います。(3)の県内の文化活動の状況でございます。コンパクトにまとめられていますが、これだけなのかなという印象を受けました。先ほども出ましたが、その後に第3期に基づいた様々な活動状況が付記されておりますが、まず県が主催している文化芸術に関する活動。それからやはり県と言ってもこの県庁だけの問題ではなく、市町村を広く網羅していく姿勢が必要なのですよね。ですから、市町村が実施している主な芸術文化に関する活動、そして最後に民間というような構成にすれば、ここで掲げる意図も見えてくるのかなと思うところでございます。

さらに24ページに行きたいと思います。ここに第2章5として、文化芸術を振興する意義、とありますよね。この内容を見ますと、まさに文化芸術とは、またはタイトルをつければ人間と芸術文化、といったタイトルがつきそうな内容なのです。その内容がここに位置付けられて良いのかなと思います。第3期の場合はこれが第1章にありました。私が思うには、いわゆるこういう大義があるから我々の生活にとっては大切なのです、だから県といたしましては確かなビジョンというものを作って今後具体の施策に生かしていきますよ、という、大義という言葉がふさわしいかどうか分かりませんが、トップに来るべきものかなと思っております。これらに基づいて様々な施策が行われま

すよ、という印象を受けるわけです。ですからその位置付けについて、少し考えていただければと思います。

続いて26ページに行きたいと思います。めざす姿。今期から新しく位置付けられました。非常に我々の目標として具体的なものになってきて、やはり活動のあり方を今後コントロールできるのかなと思います。そうした時の表現でございます。ほとんどはそれにふさわしい表現になっていますが、この目指す姿というのはやはり一つの目標値であり、どんな姿になっていけば良いのか、という文体になっていけば良いのかなと思っております。ですから例えば、2つ目の文化芸術関係者というところで、その内容を言いますと、「ジャンルを超えた出会いや交流が生まれ、新たな活動の刺激がある」とありますが、ここのところを例えば「新たな活動の刺激となるジャンルを超えた出会いや交流が生まれている状態」になっていけば良いのですよね。そういう表現、他にもありますが、これはまた後で担当者の方と少し御相談申し上げたい。そういったことでそのめざす姿の表現の仕方、文体のあり方を少し考えていただければと思います。

そして28ページです。先ほどから皆様の話題になっております新県民会館ですね。私も非常に興味がありますし、ものすごく期待しております。方針3ということで「あらゆる人が文化芸術を創造、発表、享受できる環境作り」の中で、(3)「新県民会館をはじめとする文化施設等の機能の充実」ということがあります。ここに書かれている内容は新県民会館に関することだけなのですよね。ここの標題からしますと、「新県民会館をはじめとする」とあります。ですからもう少し、39ページに書いてあるようなその他の施設との関連性なども書いていただければ、ここに位置付けとして落ち着くのかなと思っ

ている次第です。

最後になりますが、時間もありませんので、29ページ以降の各施策の説明のところでございます。これは前回も申し上げたのですが、どうしても第3期の内容をそのまま引き続き引用されているという感じなのですが、表記の仕方が、考えながら読まないで理解できないところもあるのですよね。別に気にし

なくて良いのです、読み手の問題ですから。ただしやはりその表現の切れ味というのはこのビジョン全体の品位にも関わるのかなと思うのですよね。ですからもう少しくつかあるのですが表記のあり方について、目で読めるような内容に変えてもらえれば良いのかなと思います。一番分かりやすいのは一文が長すぎると要注意です。余分な語句が入りすぎますね。そんなところを注意していただければと思います。また後で担当者と相談させていただければと思います。以上でございます。

【議長：志賀野会長】

ありがとうございます。

脚本家にもドラマドクターが必要だったように、やはり文体とか整合性とか、表現のあり方というのを、ぜひ吉田委員にこの場でお願いしておいて、皆様よろしいですかね、今のようなことを少し整理してもらうことを、もっばら吉田委員にお願いしておきたいと思いますがいかがでしょうか。ということでそこは決めて、それで皆様が良いとなるのであれば、少しそのアドバイスを受けていただいて、今とても大事なところの話になると思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

今日は、色々な論点が盛りだくさんすぎて、なかなかどこまでお話できるかなと思ったのですが、論点的なことと言いますと、だいぶ話し合うことができたなという思いがあるのですが、もう少し最後に言っておきたいことなどがあると思いますので、もう少し時間ありますよね。ではこれから手を挙げていただいて、皆様の御意見を一通りお話しいただいたというところで、挙手していただいて御発表願ひたいと思います。お願ひします。

【大澤委員】

方針の中の「文化芸術の持つ力の活用」という言葉があるのですが、これはなかなか一般的な雰囲気では捉えられるのですが、私は「音楽の力による復興センター」というところで仕事をしていただけなのですが、これはどちらかとい

うと非日常から日常への回帰、というのが音楽の仕事だったということになっています。これは震災の年の7月に読売に東北大学の野家先生が、和合さんという福島の詩人の詩が、多分陳腐だという、言葉が少し詩の言葉ではないと書かれたことがきっかけだったと思います。その中で野家先生は、和合さんの詩は日常から非日常に飛翔する言葉ではなく、非日常から日常に戻ってくるための詩だったのだと。だから陳腐なこともあったのです。つまり詩ではないということもあったと書いていますが、私たちだけでなく仙台市民では6月にはとっておきの音楽祭、それから9月にジャズフェス、そして11月頃に海外の音楽、つまり日常を取り戻すためにみんな音楽をやっていたとも読み取れるので、他の分野でどれだけのものがこういうのに出てくるか分かりませんが、「文化芸術の持つ力の活用」というのは、この災害の多い時代の中にあっては、その非日常から日常を取り戻すための作業というのが、私どものコンサートを見ていただいた音楽の先生たちからもそういう指摘がなされている時があるのですが、そういった分野も含めていくか・いかないかは別として、現実的にこの文化芸術の持つ力の活用というのには、実はそういった部分にも少し入っているというか、そんなところも少しお考えいただければなというのが1つです。

それから阿部委員、芸術家派遣事業というのがもう国からの補助で10年以上続いていて、宮城県仙台市の場合にはその地元のアーティストがその被災地に行く作業が結構多かったです。もしかすると、これだけの長い間毎年やってきている中で、何らかのノウハウ、アーティストが出て行ってどこかで触れ合うというような作業のノウハウというのが、実はもう溜まっているのではないかと疑っているのですが、もしそういうことがあるとすれば、この震災の中で得たいろんなところからの補助、支援などで得たその成果というのもどこかに入ってきて良いのではないのでしょうか。

もう一つ、私たちのような中間組織があるわけなのですが、福島には福島で民俗芸能の中間支援組織があつたりしますから、どういう組織でそういう課題解決の最前線を作っていくのかということもあって、必ずしも全てがその県で行

われるということだけではないような気がします。ただ福島の事例では、多くの民俗芸能が沿岸部に多くかなりの被害を受けたわけですから、福島の局長さんによると「福島にはもうこれしか残っていない」と民俗芸能について言ったりしています。文化庁も異例の力を入れ、福島県も異例の力を入れ、頑張っている意味では頑張っているのですが、その中には様々なノウハウが入っていますので、その辺りのところを見ていくと、その中間的な支援組織のあり方ということがもう少し見えてくるのではないかと思っております。以上です。

【議長：志賀野会長】

はい。ありがとうございます。

今の御指摘はとても大事なのですが、どういう点で大事かという点、いわゆる県民会館内で組織化して「部」という風に作る、いわゆる内臓型でやるか、アウトソーシングをしてはどうかということですよ。これはやはりとてもじゃないけど、この幅広い色々なことをできるわけがないので、そういう意味では巷と言ったら良いのか、ある、あるいはあった組織のリサーチを含めて、そういう集団や個人、これをいわゆる人材プールなり団体プールなりとしてプロットして、そこにアウトソーシングをするというのが一番よろしいのではないかと思うのですね。ということは、逆に全部隅から隅まで予算査定がありますから、何をどう使うんだと県庁としてはやらなければならないのですよね。でもそうじゃない、内容が隅々まで確定していない予算をそういうために用意することをするのも一つの方法かもしれませんね。何かそういうことをしないと、とにかく手いっぱい、担当者は眩暈がするだけになってしまうのではないのでしょうか。そう思いますし、先ほど出たそのアート系も、アーティスト・イン・レジデンスの専門家が来ているわけですから、当然その方にフルに活動していただくことは当然なのですが、それだけではなかなかうまくいかないわけで、村上委員が活動をすごいやりましたよね、震災の時に。ああいったものをもう少し継承・活用というのですか、考えた方が良いような気がしますね。そうすると、阿部委員も少し気楽に肩の力を抜けるのではないでしょう

か。今の意見に少し付け加えて私が申し上げました。

そのほか、高田委員いかがでしょうか。

【高田委員】

とにかく思いのこもった素晴らしい内容を掲げたビジョンですので、これをじゃあどう実現していくかというところでお話を聞いておりました。なので、何度も話が出てきたアソシエイトディレクターさんなどが、まず県内の各施設の特徴や個性をヒアリングし、また芸術団体などを洗い出して現状の把握をしマッチングして連携するような、何か外に出て動く体制というものが、県民会館においては重要なのではないかなと感じております。

杉村惇美術館において、大衡村ふるさと美術館との間で、マイクロバスを出して互いのプログラムに参加し合うという事業を、助成金を活用して実施したのですが、参加された方々は「車を運転しづらくなって県内にたくさん素敵な美術館があったり文化施設があるけれど行きづらい」と感じていたところで、「こういう機会があるとすごく嬉しい」「文化施設の活性化になるわよね」とおっしゃっていただいております。これも低予算で、助成金は活用したのですが、いかようにも施設連携のあり方であると思うのですよね。なので、その各施設の特徴や個性をまず把握して、そして生かし合う。そのハブ的要素として県や県民会館が機能していくと良いのかなと感じているので、全てを担うというよりは、それぞれが連携を組んで可能なところで展開していく。芸術団体や施設の方がネタはたくさんお持ちなので、やはりこういう意見交流の場に、アソシエイトディレクターの方なのか、そういった役割の方が入ることによってビジョンの実現が可能になっていくと良いなと思いました。

10ページにある施設構成の部分が少し気になっていました。「民間非営利活動部門」「創造・育成・連携拠点部門」などとは記載されていますが、担当者が貸館機能だけで業務を終わらせないように、今後の具体的な施策の中で検討されていくとよいと思いました。

このビジョンを県民の一員としてどのように実現していくかについて、考え

を巡らせていました。まとめていただきありがとうございました。

【議長：志賀野会長】

アソシエイトディレクターは高田委員もすでにそのような役割を担っていらっしゃると思いますね。また、いわゆる美術館をお持ちですよ。ビルドフルーガスは個人のギャラリーですが、もう一つ美術館（杉村惇美術館）を運営されています。それも連携のポイントになるわけですので、もう少しそういった隅々のリストアップ、県内のアート系のポイントとなるノウハウや美術館を広くリストアップし、プロットすることですね。ホールだけでなく、他の場所でも活用できる場所はあるわけですから。私もアウトリーチとして様々な店舗でコンサートを行いました。ピアノがあれば実施できる場所もあります。ピアノの有無でスペースの意味が違ってくるのですが、そうした場所をプロットすることで、音楽的な意味での行事ができる・できないというのが見えてきます。林さんが調査を行っているので、それを表や地図にして、イベントが可能な場所を多く見つけると良いですよ。そういうことで、県全体のボトムアップということを考えたら良いのではないのでしょうか。

また、論点として観光についてもさらに掘り下げる必要があったかもしれません。高田委員のところはカナダとのネットワークがありますよね。

【高田委員】

カナダとニュージーランドと韓国です。

【議長：志賀野会長】

そうしたネットワークを既に持っているもので、今言われて知るわけですが、みんなそれぞれたくさん持っているわけですよ。サーベイランスと言いますけれども、それを一度やってみると面白いのではないかと思いますし、現在インバウンドと言っていますけれども、かつて日本の年間観光客数は400万人、800万人でしたが、6月時点で2000万人を超えています。このイン

バウンドラッシュがいつまで続くかは不明ですが、備えが必要ですし、外国人から見て面白い場所は多くあるわけですね。そういうインフルエンサーが関わることでそれが飛躍的に広がるのが現代の特徴ですね。アート系や文化芸術系の面白いインフルエンサーを探すこともお願いしたいです。そうした人材をキーとして、市場を形成し、広げていくことです。マーケットは見えないところで進んでいくので、今後は新聞だけでなく、そういったものを活用した情報発信も必要となるでしょう。ビジョンにも何か書いてあったかと思うのですが、イメージとしてはそのような形ですね。他に質問はありますか。なければ議論はこれで終了とさせていただきます、後日メール等でも何かあればお願いします。このビジョンについての審議は終了します。

【事務局】

志賀野会長、議事進行ありがとうございました。委員の皆様も大変貴重な御意見をありがとうございました。

以上をもちまして、令和7年度第一回宮城県文化芸術振興審議会を閉会とさせていただきます。長時間にわたり御審議をいただき、誠にありがとうございました。